仕事談話 ～先輩たちに聞く～ 1

「将来どんな職業に就こうか」「将来何をしようか」と、迷っている人は多いはず。
自分が知っている選択肢の中だけで決めようとはしていませんか。
世の中には意外と知られていない多種多様な活躍の場があります。
そこで今回は、仕事やさまざまな活動で多彩に活躍されている卒業生を紹介。
広い世界を見て、未来を考えるヒントにしてください。

職場にて

社会と関わってこそ 気付くことがたくさんあります。

落田真紀子さん

●プロフィール
1997年3月、経済学部経済学科卒業。
現在は、新潟県魚沼地域振興局企画振興部に所属。

職場の正面玄関で

落田さんは現在、新潟県魚沼地域振興局企画振興部にご勤務とお聞きしました。就職のきっかけは何でしたか。

落田●私は大学入学当初から漠然とですが、生まれ育った新潟に何か貢献できる職につきたいと思っていました。在学中は就職活動に失敗し、就職浪人中、新潟市職員がいいのか新潟県職員がいいのか結構悩みました。結局、新潟県の職員として働ければ、新潟市=都市部だけでなく、新潟県のいろいろな地域に関わることができると思い、新潟県の試験を受け、平成10年に一般行政職として採用になりました。

採用から2年後、最初の異動で当時の北魚沼郡小出町（現:魚沼市）にある小出保健所勤務となりました。生活環境も新潟市内の親元での生活から、魚沼での一人暮らしとなりました。新潟市以外の地域で働いてみたいという願いはかなったのですが、最初の頃は正直に言うと魚沼という地域に対する知識も無ければ思い入れも持てず…周りから見るとつまらなそうに働いていたようです。しかし仕事を通じて、また、仕事以外の人達との付き合いによって、徐々に魚沼の魅力が分かるようになっていき、今ではすっかり魚沼が好きになってしまいました。

小出保健所勤務の頃

県職員として地域で活動してきたことについての意義、仕事の楽しさや難しさについて教えてください。

落田●本来、公務員は社会のため公の奉仕者として働くべきものです。しかし私の場合は、魚沼のために働いているというより、魚沼という地域が私に生活や仕事の楽しさを気づかせてくれた感じさえしています。

県職員が地域で働くということは、公務員として地域のために何かをしてあげようと押し付けるのではなく、地域の中に入っていって、この地域には何が必要なのか、何を求められているのか、地域の本当の声を聞く、感じるという姿勢が大事なのだろうなと思います。現場が近いというのは難しいこともありますが、今の私にとってはむしろ生きがいの感じられる楽しいことです。

地域振興としてどのような活動をされているのでしょうか。

落田●地域振興にはいろいろな形がありますが、たとえば、地域の魅力を発掘しいろいろな形で情報を発信していくことです。魚沼地域振興局では、特産物などの首都圏でのPRや、地域資源のデータベース化を行っています。私も、地域向けの広報紙を作成したり、県のホームページに地域情報を掲載したり。最近では、フィルムコミッションという、映像の制作側へ地域の情報を提供してロケ地を誘致しようという非営利組織の設立準備にも少し携わらせてもらいました。

地域の情報を発信し、魚沼の魅力を多くの人に知ってもらうことで、交流人口の拡大や地域の活性化につなげていけばということなのですが、それ以上に、自分たちの地域の良さを自分たちが実感するきっかけになるといいなと思っています。

新潟県魚沼地域の良さは何ですか。

落田●何といっても「人」です。魚沼に来てから、大勢の方からとても温かく親切に接してもらっています。人事異動がきっかけの、偶然の魚沼の生活ですが、魚沼の人達と知り合えて本当に良かったと思っています。あと、月並みですが、自然・水・食べ物。西日に照らされた越後三山には見とれてしまいます。ご飯も、新潟市でも十分美味しいと思っていたのですが。魚沼に来ることがあったら、普通のお店で、普通に定食などを食べてみてください。絶対美味しいですよ!

新潟大学の思い出、魅力は何でしょうか。

落田●新潟大学。もっと勉強すれば良かった。真っ先に浮かぶのはこの言葉です。大学へ行っている時間より、バイトや旅行をしている時間の方が長かったですから。せっかく豊富なカリキュラムが用意されていたのに、全然活用しませんでした。もったいなかったと今になって思います。

最後に、後輩の皆さんにメッセージをお願いいたします。

落田●私自身の反省をふまえて。自分の自由に行動できることが学生時代の素晴らしさですが、やりたくないことや面倒なことからあまり逃げないで向き合ってみてください。社会に出たときにぶつかる壁を覚悟して、乗り越える強さを少しでも多く身につけてください。そのうえで豊富な時間を存分に活かして、ぜひ楽しい学生生活を送ってください。

学生時代のバイト先の
先輩と粟島へ（右が落田さん）

Makiko OCHIDA

仕事談話 ～先輩たちに聞く～ ②

幅広い職業選択のために
～人の縁とプロセスの習得～

現在の職場である
総務省統計局にて

佐藤朋彦さん

●プロフィール
1981年3月、理学部地質鉱物学科卒業。同年、総理府統計局に入局。1991年経済企画庁経済研究所へ、2002年福岡県庁へ、2004年東京大学社会科学研究所へ助教授として出向。現在は、総務省統計局統計調査部消費統計課に所属。

佐藤さんが総理府統計局に入庁された経緯をお話しください。

佐藤●実は大学卒業後、すぐに総理府統計局へ入ったのではなく、半年ほど母校の高校で講師をしていました。その年の夏ごろに総理府統計局でプログラマーの採用試験があり、それに合格して統計局に採用されました。プログラマーの採用試験を受験するきっかけとなったのは、大学1年の教養課程の授業で統計を学んだことにあります。

東京大学社会科学研究所の研究室にて

その授業を担当された農学部林学科の高田和彦教授が数ヶ月ほど海外に出張されることになり、その間、統計を学ぶのにぜひ必要だからとのことで、当時の電算センターの方からFORTRANによるプログラミングを教えていただきました。

また、教養課程で統計を学ぶことを勧めてくれたのは、たまたま新入生歓迎コンパで隣の席に座られた地質鉱物学科の島津光夫教授でした。この二人の先生に出会わなければ、統計の仕事をしていなかったと思います。

現在はどのようなお仕事をされているのですか。

佐藤●私は現在、統計調査部の消費統計課におります。当課では個人消費の動向を需要側から把握する家計調査および同調査を補完する家計消費状況調査を実施し、その結果を毎月公表しています。その中で私は調査結果の公表や同調査の標本設計等を担当する3つの係（スタッフ11名）を統括する仕事をしています。

統計は卒業してから使うことが多いのですが、授業で習う統計は意外と実践的でないように思います。統計を学ぶ上で何がポイントでしょうか。

佐藤●確かに統計を授業で習うと、分散や変動係数、χ^2検定などという用語やΣやΠの付いた算式に振り回されてしまうことが多いかもしれません。しかし、統計を学ぶ際には、まずは集計されたデータ、すなわち結果表（人数や平均金額など）の値から分かる特徴をとらえる力を身に付けることが重要です。

これは余談ですが、最近は膨大なデータでもパソコンにより手軽に統計分析ができるようになりました。そのため、分析するデータの分布状況や項目間の関係など基本的な特徴を確認せずに、多変量解析などの高度な統計分析を行う人がいます。しかし、統計分析は手順を踏まないと、手法は正しくても誤った結論に至ってしまう危険があります。

統計の魅力は何でしょうか。

佐藤●調査や実験で得られた個々のデータを見ていたのでは、対象全体の傾向や特性は分かりません。しかし、得られたデータを統計的に処理することにより、それらが明らかになること、これが統計の魅力ですね。私が携わる行政の面では施策の立案、実施およびその評価の上で、統計は欠かせぬものです。特に経済統計は、我が国の経済運営にとって必要不可欠な情報です。

学生時代の印象深い思い出をお話しください。

佐藤●地質鉱物学科では卒論のほかに4年生へ進級するための進級論文が3年次にあり、どちらもフィールドへ出て地層や岩石を調査することが必要でした。これらの野外調査や、そこで採集した岩石・鉱物の分析の際に指導教官のほか、院生の方々からも熱心に指導していただきました。特に卒論では、当時、助手だった赤井純治先生（現在、教授）からマンツーマンでご教授いただいたことが今でも忘れられません。また、後輩の方々に野外調査や卒論発表の準備の際に大変お世話になりました。

卒論野外調査にて後輩と一緒に
（右が佐藤さん）

将来の夢はどのようなことでしょうか。

佐藤●今年の3月まで2年間、東京大学の社会科学研究所において、民間の調査機関や大学等の研究者が実施した社会調査等のミクロデータ（個票）を収集、整理、保存したデータアーカイブの管理・運営を担当するとともに、それに関連する研究に従事していました。また、経済学部において経済統計の見方を中心とした授業を担当いたしました。そこで、機会があればこの経験を生かし、いつか母校である新潟大学において、何かお役にたてる仕事、恩返しができれば大変嬉しいことだと思っています。

最後に、後輩の皆さんにメッセージをお願いいたします。

佐藤●私の場合、専攻した地質学や鉱物学の知識等をそのまま活用する職業には就きませんでしたが、ゼミや卒論などの際に学んだ研究分析の過程が職場では大変役立っています。専攻する学問の知識の習得だけでなく、新たな知見を導き出すプロセスも身に付けて社会に出れば、どんな職業に就いても良い結果が得られると思います。

データアーカイブのシンポジウムに出席

Tomohiko SATO

仕事談話 ～先輩たちに聞く～ ③

社会の一員として私にできること

学校訪問活動

岡田朋子さん

●プロフィール
1991年3月、歯学部卒業。現在、歯科医師の傍ら、新潟動物ネットワークの代表として活躍。
新潟動物ネットワークホームページ　http://ndnland2.picot.ne.jp/NDN_HP.html

岡田さんは、新潟動物ネットワーク（NDN）代表を務められていらっしゃいますが、どのような活動をされているのですか。

岡田●NDNは「身近な動物たちの問題をできることから解決していこう」という主旨で5年前に立ち上げた会です。主な活動は保健所に収容された犬や猫の飼い主探し、子どもたちに命の大切さや動物を飼うことの責任感を伝える学校訪問活動、飼い主のいない猫のお世話をしている人への支援、劣悪多頭飼育現場（1人で100匹近くの犬猫などをひどい環境で飼育している現場）の環境改善などです。

新潟動物ネットワーク設立の動機は何だったのでしょうか。また、順調に設立できましたか。

岡田●たまたま街で手にしたチラシがきっかけです。「動物園の動物は幸せなの?」と書かれたALIVE（地球生物会議）のチラシを見てショックを受けました。動物は好きだけど、動物の立場にたって考えたことはなかったので、これはいけない…と。身近な問題を解決していくことで、最後は何かにつながっていくんじゃないかと考えて有志で会をたちあげました。

最初は何ができるかわからず、保健所の剥き出しのコンクリートで寒さに震える犬を見て、古毛布を送ることから始めました。失敗のくり返しで今があるように思います。

スキー部合宿（後列右から3人目が岡田さん）

歯科医師として地域歯科医療に携わる傍ら、もうひとつの地域活動かと思います。地域活動を行っていく上での共通点や相違点などはありますか。

岡田●社会の一員として何かに自分を役立てる、という点で同じだと考えています。歯科医師として患者さんの健康管理をする一方で、私のような素人でも身近な動物問題に何らかの役に立てていることを実感しています。

卒後研修にて

小・中学校、高等学校で講演を行っているとお聞きしました。どのような講演をされているのですか。

岡田●ペットとして飼われている犬や猫が新潟県だけでも1年間に約5,000匹が殺処分されている現実をお話しています。そして、不幸な境遇から今は幸せに暮らす動物たちを紹介して、実際に触れ合うことで命の大切さを伝えています。子どもたちは本来、純粋で動物を慈しむ優しい心を持っていて、バーチャルな世界ではない現実を伝えることで驚きと自覚を持ってくれるように思います。

保健所で処分された猫たち

今後どのような活動をしていく予定ですか。

岡田●私たちの生活にはペットに限らず多くの動物が関わっています。人間も動物も共にしあわせに暮らせるような社会になることが理想です。そして、NDNのような会がなくなり、それが当たり前のことになれば良いなあと思っています。

新潟大学の五十嵐キャンパスには多くの猫が住み着いているようです。後輩の皆さんにメッセージをお願いいたします。

岡田●元々、猫は野生動物ではありません。「捨てる人間」がいて、そこで「生きていくしかない猫たち」が存在するのです。卒業シーズンになると飼い主のいないアパートの前でじっと待つ猫の姿があるそうです。安易に飼わないこと、絶対に捨てないこと、そして今ある命を大切にすることですね。猫は年に3回くらい子猫を産んでしまうので、繁殖制限のための不妊去勢手術は絶対にしてください。

岡田さんの愛犬「太郎」（新潟市保健所から譲渡）

Tomoko OKADA

仕事談話 ～先輩たちに聞く～ 4

たった一度の人生、あなたはどう生き抜く?

吉井雅栄さん

●プロフィール
1987年3月、工学部電子工学科卒業。
現在は、弁理士として吉井国際特許事務所（長岡市）に所属。

クライアントの工場内にて

職場にて

吉井さんは工学部をご卒業し、弁理士をされているとお聞きしました。どのようなお仕事をされているのですか。

吉井●弁理士は、特許等の知的財産権（独占権）取得のための出願手続きや、これに関する訴訟手続きの代理人として認められている国家資格で、主に理工系大学出身者が大半を占めています。もちろん弁護士さんも弁理士は法律資格の一つですから弁理士資格を有しています。

私は工学部出身で、依頼を受けた県内企業の発明を理解し、これを図面と文章にして、スムーズに独占権たる特許を取得しつつも、可能な限り広い権利範囲を得るべく特許庁と争うこととを主な仕事としており、私自身年間200件くらいの特許を企業から任されています。

特許成立の成功率は、どのくらい権利範囲を狭くするかによって左右されるもので、これはクライアントの意志によって決まることも多く、一律なものではないのです。

この仕事は日々新しい発明と出会うことになり、毎日が驚きであり、いわば日々違う仕事をしています。

この辺はみなさんの想像を絶するかもしれません。電子工学科卒でありながら、食品関連に奮闘したり、樹脂成形機を学んだり、携帯電話のメカ部分を細部にわたって特許取得したり、中国からの模倣品を裁判でやっつけたり、逆に中国側に立って大手メーカーからの特許攻撃をかわすべく改造に手を貸したりしています。

水筒があんなに安く特許問題なく販売されているのにも、実は私が一枚からんでいるんですよ（笑）。

弁理士になるにはどうしたらよいでしょうか。

吉井●弁理士の国家試験の試験科目は、主に知的財産権に関する法律科目であり、東京の予備校に通っておよそ5～7年、働かず浪人状態が確保できれば2～3年で合格可能な試験です。

私も大学3年生の時に上京し、約3年で合格し、弁理士18年目です。

弁理士の資格は、弁護士と違ってほとんど理工系の受験者であって、その職業はあまり知られていなく、いわば技術系の脱サラ資格で平均合格年齢は30～35才です。会社勤めの途中でいつか会社を辞めてやるなどの気持ちからこれを目指すのが一般的パターンかもしれません。

従って、学生時代からそのまま浪人して働かずに勉強できる環境を得れば、楽しい青春時期ではありますが僅か2～3年間世の中との一切の接触を絶てば、絶てればですが比較的容易な試験です。

そもそも私は2代目で親が全面的にバックアップしてくれましたので、大学3年で留年したのを契機に、新潟と東京に二つのアパートを借りながら在学中から勉強を始めて、卒業後1年間は人との接触もテレビ・映画も一切絶つことで、他の受験生に比べれば苦労なく合格しました。

傍目では理工系の学生は法律などを敬遠しがちかと思います。ご苦労はありますか。

吉井●法律は受験勉強でたっぷりしましたし、専門外の法律は弁護士さんと常にタッグを組んで仕事をしますのでこの点苦労は感じませんが、やはり特許権侵害による損害賠償など企業の命運がかかる場合すらありますので、そのプレッシャーは常にあります。

弁理士をされていて、興味深い出来事などはありましたか。

吉井●仕事をして18年、本当に色々な発明に接することができ、日々興味深い出来事ばかりです。

様々なことを浅くしか知ることが出来ませんが、地方にいて様々な中小企業から仕事を頂いていますので、東京に比べて広く色々なことを知ることができ、直接現場を見、また経営のトップの方や開発のトップの方とお話をする機会も多く、この経験は本当に私の財産と感じています。

学生時代の楽しかった思い出を教えてください。

吉井●学生時代の思い出は、ゴルフ部に属し、毎週楽しくキャディーをしてその後仲間と楽しくラウンドしたことにつきます。

お仕事に関することで、将来の夢はどのようなことでしょうか。

吉井●特に大きな夢を持ったことはありません。小さな夢が少しずつ叶うことで満足していますが、自己満足かもしれませんが、少しでも地元新潟のためになっているのであれば幸せです。

地元の方々からかわいがられて仕事をし、地元が発展し、僅かでもその力になっていることが少しでも実感できればと思って仕事をしています。

最後に、後輩の皆さんにメッセージをお願いいたします。

吉井●卒業後20年振り返って思うことは、果たして好きな道を自分は選び、好きな道を進んでいるかどうかということです。

ぜひ学生の皆さんは周りに惑わされず、自分の好きな道、やりたいことを見つけてそれを職業にして下さい。よく言われることではありますが、これを実践している人は意外に一握りの限られた人で、人生に恵まれた人だけであって且つ本当の努力家だけと思います。本当の幸せ・楽しさはこの一握りの努力家達だけに許されているような気もします。

もちろん、私も私の友達も当時考えましたが、やはり周りのしがらみや宿命だけでなく、どうしたら自分の小さな能力で楽にお金や家が手に入れられるかなどを考え、楽な方へ、楽な方へと周りに流されながらその中で努力し、幸せを追い求めて生きてしまいます。こうすることで人よりも少し良い生活は手に入れられますが・・・。

もちろんこれを全うすることだけでも難しく、そして恩を受けた方々へ恩返しすることも簡単そうでいて難しいと思います。

しかし、たった一度の人生、せっかく新大で学び、普通の人以上の教育を受け恵まれた力を少なからず持っているのですから、お金のことなど考えずに好きな事を極めて頂きたい。

私の見る限り、好きなことを極めれば必ずお金はあとからついていっています。

例えば、先の工学部80周年の毛利さんの宇宙飛行士を目指した講演を聞きました。当時学生時代であれば、成れっこない、自分の能力からみてこれを目指すなどは子供じみている、死ぬほどの努力が必要そうだ、どうやって将来食べていく、まともな家に一生住めないなどと考えていたでしょう。しかし今は好きなことに没頭して20年経てば夢は叶い更に夢が広がり、自らの成長を感じ幸せを実感する。お金ももはやあとから必要なだけついて来るのだと改めて確信しました。毛利さんに限らず、あらゆる分野で好きなことを20年没頭して努力した人には素晴らしい道が開けています。

ぜひ、好きなことに人生をかけてみて下さい。

Masaei YOSHII